

---

「社会空間論の再検討 時間的視座から」(平成19年度第5回研究会)

日時:平成20年2月23日(土曜日) 午後1時より午後6時半

場所:AA研マルチメディアセミナー室(306号室)

報告者名(所属)/報告タイトル

1. 佐藤知久(AA研共同研究員、京都文教大学)「HIVとともに生きる人びとにおける時間性:未来性への態度をめぐって」
  2. 高木光太郎(AA研共同研究員、青山学院大学)「証言の時間論」
- 

HIVとともに生きる人びとにおける時間性:未来性への態度をめぐって

佐藤知久(AA研共同研究員、京都文教大学人間学部)

後期資本主義あるいはポスト近代とも称される現在において、〈未来のための自己規律化〉はローカルな文化あるいは社会の差を越えて遍在する現象である。われわれは〈今現在〉を〈未来〉のために投資さるべき資源とみなし、現在を犠牲にしてまでも未来をめざすという精励刻苦に日々いそしんでいる。このような自己規律化の動きが生む問題は多々あるが、そのひとつは自己規律化が自己を支援しようとする他者をも自己の未来に対して投資さるべき資源として見る態度を生み出し、しばしば自己にとって不利益な結果をもたらしかねないということだ。

本報告では第一にこうしたケースについて、合州国ニューヨーク市ブルックリン地区でHIVに感染し、支援NPOからの支援を受けていたある男性の場合について、当人・周囲の人びと・支援者たちの思惑が錯綜した結果、当人の自立生活への企図が頓挫する結果に終わった事例を紹介し、自己規律化の動きが社会的支援の現場で負の要因として働くさまを、まず叙述した。こうした事例は、支援を必要とする人びとと支援を行おうとする人びととの関係を分裂させる力の存在を示唆するものである。日常的な場面ではこの力は「生活の変化は当人によってしか行うことができない」という論理によって裏打ちされているが、それは自己規律化の動きとパラレルなものである。

ただし、ニューヨーク市のHIVとともに生きる人びとのあいだを、〈自己規律化と関係の分裂生成〉あるいは〈自己規律化の破綻と援助への依存〉というような形式のみが覆っているわけではない。本報告では第二に、1980年代後半から1990年代前半頃までに隆盛を誇った社会運動体「ACT-UP/New York」をとりあげ、社会運動と社交あるいは社会空間的な関係が共存し、未来のために現在を犠牲にするのではなく、〈今現在〉がそのまま豊饒な社会運動であり、相互に幸福を与えあうような場に関する事例について、運動参加者へのインタビューをもとに報告した。

1987年に創設されたACT-UPは「怒りのもとに連帯しAIDS危機を終結させるための直接行動に取り組む諸個人によって作られる、多様かつ非党派的な集団」である。ACT-UPはグラフィック・アートやメディア戦略の巧みさにおいて知られるが、同時にそれは、運動に参加する人びとにとっての、性的関係を含む社交あるいは友愛の集団、「クイアーな快樂

に捧げられたコミュニティ」でもあった。そこには、相互的な快樂が未来へのラディカルな運動へと変換され、それが新たな快樂を生むという社会空間が成立していたのである。

だがこうした豊饒な現在、運動体＝社会空間は、AIDS 危機という問題の政治的複雑さ、さらなる運動の徹底を求めることによる快樂主義の否定、運動が大きくなりすぎたことによる運動体内での役割の分業といった種々の理由によって、「一種の古びた左翼グループ」へと変容していつてしまう。それは「よりオフィシャルな」「ビジネスに集中する」「大人向きのミーティング」になり、参加者たちの楽しみとアクティビズムの活気の双方を失わせていつたのである。

ACT-UP の衰退は、運動の未来をめぐる対立や、現在に対する否定的評価（これらは表裏一体のものだ）によってもたらされたものであり、それを運動体自体の自己規律化の一例と解釈することも可能である。しかしここではその潜在的な特性、すなわち ACT-UP が未来のみならず今この現在のために、かれらのことばでいえば「快樂かつ政治」のために成立した社会空間だったという特性に着目しておきたい。なぜならそれは、目的＝未来志向的な態度の枠をとりながらも、HIV に感染した人たちにとって相互に豊饒な現在を成立させるような社会空間が存在可能だということを示唆するからである。たしかに個々人あるいは社会運動の双方のレベルにおいて、自己規律化の動きは強力に現在を、今ここにある他者との関係を再組織している。それを近代化の力と呼ぶことができようが、人類学はこれまでそうした近代的な力に抗して抵抗する非近代的・特殊文化的・伝統的な力の存在に着目することで、現在についての記述を深めてきた。しかし冒頭に述べたように、このような近代的な空間を離脱することは今や不可能に近い。だが ACT-UP の事例は、目的・未来志向的な時間性が個々人を束縛する近代的空間にあっても、未来に達成されるべき幸福に対してのみならず、今・ここに成立する快樂へと捧げられる社会運動、社会空間が同時に成立しうること、そのような異なる未来性への態度をもった空間のあいだを行ったり来たりしうることの可能性を示しているのである。

## 「証言の時間論」報告要旨

高木光太郎（AA 研共同研究員、青山学院大学社会情報学部）

刑事裁判においては特権的存在者の視点をとることが原理的に不可能であるため、供述はその意味を確定するために必要な文脈を与えられず「不定さ」を帯びることになる。供述信用性評価の課題は、こうした供述の「不定さ」への何らかの対処を提案し、事件の「真相」「事実」をめぐって法廷で展開される社会的合意形成の過程を支援することにある。本報告では、このような供述信用性評価の可能性を「過去の出来事」という時間と現在との関係を軸として検討した。

供述信用性評価を試みる従来のアプローチは、供述の「不定さ」を縮減することを目的としている。このためには「過去の出来事（事件）に関する推定」と「過去の出来事（事件）と供述の関係に関する推定」が必要となる。供述の「不定さ」の縮減を目的とする代表的な供述信用性評価技法の一つとして目撃証言アプローチを挙げることができる。この

アプローチは、法廷のメンバーによって予め合意された「争いのない事実」を過去の出来事（事件）の一部を構成する「事実」と推定し、これに対応する実験的知見に基づいて記憶が変容した可能性を推定し、供述の「不定さ」の縮減を試みる。このため分析に利用可能な「争いのない事実」が存在しない場合に分析が不能となる、「争いのない事実」に対応する実験的知見の選択が恣意的になる可能性がある、といった困難がある。

供述分析アプローチは反復聴取された供述間にみられる変遷の構造に注目し、そこから供述に対する供述者と尋問者の関与のあり方（コミュニケーションの構図）を解釈的に導きだそうとするものであった。このアプローチではまず供述の変遷構造に基づいて取調室におけるコミュニケーションの構図が推定されたのち、この構図と供述調書にみられる他の諸兆候を利用して供述者における犯行体験、目撃体験の有無が推定されることになる。供述分析アプローチは、日本独特の供述記録の様式である一人称独白体の供述調書の分析を可能にした点で実践的な重要性をもつことに止まらず、Bartlett（1932）の想起理論や、内部観測論（郡司，1997）にとの理論的な連続性もあり、極めて興味深い試みであると考えられる。しかし、分析実施の前提として供述の反復があり、またそこに一定程度以上顕著な変遷の構造が見いだされることが要求される。また、変遷や兆候の分析が人間の行為の常識的な了解可能性に基づく解釈的な方法によって行われるため、解釈の妥当性への疑問や、他の解釈の可能性の提案に十分な科学的根拠を持って対応できないという困難がある。

供述をコミュニケーションとして捉える立場を維持しつつ、しかし供述分析アプローチのように過去の出来事（事件）に関する解釈的な推論を行うことなく、個的水準の叙述の回路を供述信用性評価に組み込む方法を探求する必要がある。本報告では、以下、その可能性を検討した。まず前提的な作業として供述を記憶によって説明することの原理的な困難性を指摘した。次にコミュニケーションとして供述を捉えるために必要な視点を得るためにエスノメソドロジーによる記憶・想起研究の問題点を検討した。その結果、刑事裁判という社会的実践に介入的に関与するためには、何らかのかたちで供述者の個的水準にアプローチする必要があること、および、尋問コミュニケーションの社会的諸関係の水準がもつ複雑性を視野に入れる必要があることが確認された。そこでまず、尋問コミュニケーションの社会的諸関係としての水準がもつ重層構造の検討を行った。その結果、尋問コミュニケーションを「特定の過去の出来事への共同参照の構築」「共同想起への参加」「インタビュー型コミュニケーションへの参加」「説得・承認型コミュニケーションへの参加」という4層からなる「ねじれ」を内包した重層構造として捉えることが提案された。次にコミュニケーションとしての供述に個的水準を組み込むための準備作業として想起の再定義を行った。これは想起を環境の探索としてとらえるものである。次に、この再定義をふまえ過去の出来事に結びつく事象が現前していない状況における環境の探索となる再生の構造を検討した。その結果、再生においては現在の環境において旧事象の探索に失敗する者と、その身体が志向する対象を確定できない他者との間に二重の不安定性が生じることが明らかになった。この構図を供述者と尋問者との関係に適用したものを「供述のダイアログ空間」と呼ぶこととした。最後に供述のダイアログ空間として把握された供述の個的水準と、社会的諸関係の水準の関係を検討し、後者が物語化の作用によって前者

を隠蔽する傾向を持つことが指摘された。